

# 丹後の「謎」の古代寺院 ～俵野廃寺新発見の軒丸瓦と新たな謎～

村田和弘

## 1. はじめに

俵野廃寺は、京丹後市網野町俵野に所在する飛鳥時代の古代寺院として古くから知られる遺跡である。現在、丹後地域で確認されている古代寺院は、宮津市国分に比定されている丹後国分寺<sup>(注1)</sup>と鎌倉時代の文献「丹後国諸庄郷保惣田数帳」に記されている国分尼寺<sup>(注2)</sup>、不時発見で確認された俵野廃寺であり、飛鳥時代の寺院としては俵野廃寺のみである。

これまで発掘調査は行われておらず、伽藍配置や寺域などの詳細については不明であった。しかしながら、平成18～20年度の調査によって、これまで謎が多かった俵野廃寺の一端を調査する機会を得た。調査は、遺跡範囲のほんの一部であったが、貴重な資料を得ることができた。その新たな資料を紹介し、発掘調査によって分かってきたこと、そして、さらなる「謎」について整理したい。

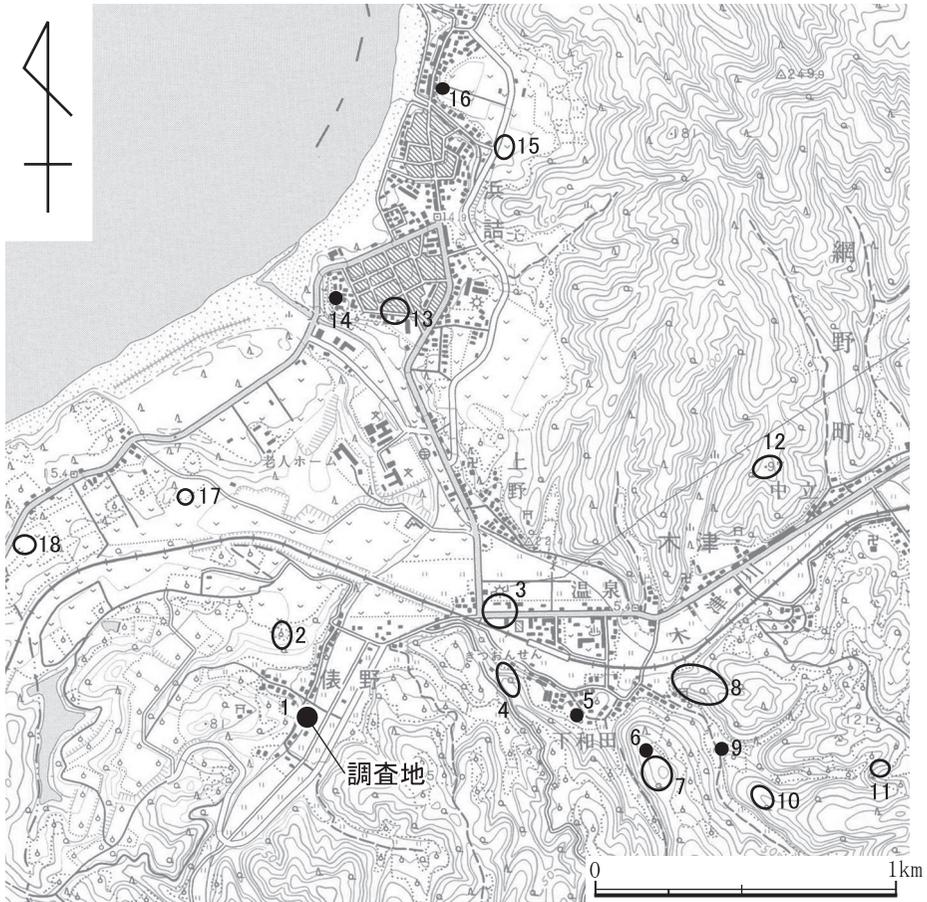
## 2. 俵野廃寺の位置と環境

俵野廃寺が所在する京丹後市網野町は丹後半島西部に位置し、約17kmにわたって日本海に面している。中心部の網野付近には北流する福田川に沿って小さな平野部と町域西部の木津温泉周辺に平野部があるが、それ以外は山間地である。俵野廃寺は、北近畿タンゴ鉄道宮津線丹後木津温泉駅より西へ約700mにある北に開口する幅約150mほどの狭い谷筋の西側丘陵の裾部に立地している。俵野川は、現在は西側丘陵の裾部に沿うように流れているが、大正11年に行われた流路変更工事の前までは谷の中央部を流れていた。

俵野廃寺の周辺には、日本海に面したところで、縄文時代後期(約3,000～4,000年前)の浜詰遺跡、丘陵上には浜詰古墳群や大泊古墳群、はやし古墳などが存在する。平野部の木津川流域では、縄文時代前期～弥生時代中期・古墳時代～奈良時代の複合集落遺跡である松ヶ崎遺跡、丘陵上には下和田古墳などが分布している(第1図)。

## 3. 俵野廃寺の発見と発掘調査の概要

俵野廃寺の発見は、大正11年に行われた俵野川流路変更工事によって、塔の心礎と思われる礎石と土器、複弁蓮華文軒丸瓦などが採取されたのが初めてである。心礎は、「木津村誌」木津村誌編集委員会編(1986年)には、径約1.8m、高さ0.58mを測り、ほぼ円形の自然



1. 俵野廃寺 2. 丹ノ谷古墳群 3. 松ヶ崎遺跡 4. 大森城跡 5. 下和田古墳
6. 女布谷西古墳 7. 下和田B城跡 8. 下和田A城跡 9. 売布神社経塚
10. 女布谷古墳群 11. 天王山古墳群 12. 中館城跡 13. 浜詰遺跡 14. 浜詰経塚
15. 浜詰古墳群 16. はやし古墳 17. 月出遺跡 18. 柴古遺跡

第1図 周辺遺跡分布図(国土地理院 S=1/25,000 久美浜)

石の上面を削平し、中央に径約0.15m、深さ0.16mの舍利孔を穿つものであったこと、心礎の付近で布目瓦の破片が層になって埋まっていたとも記載されている。これらの発見によって、この地に古代寺院が存在していたことが明らかになった。さらに、昭和24年頃には、礎石が発見された位置より約10m北側での護岸工事の際、柱根数本と鬼瓦が発見された。昭和58年には、暗褐色の地層からほぼ完形の重弧文軒平瓦や布目の平瓦、須恵器などが発見されている。

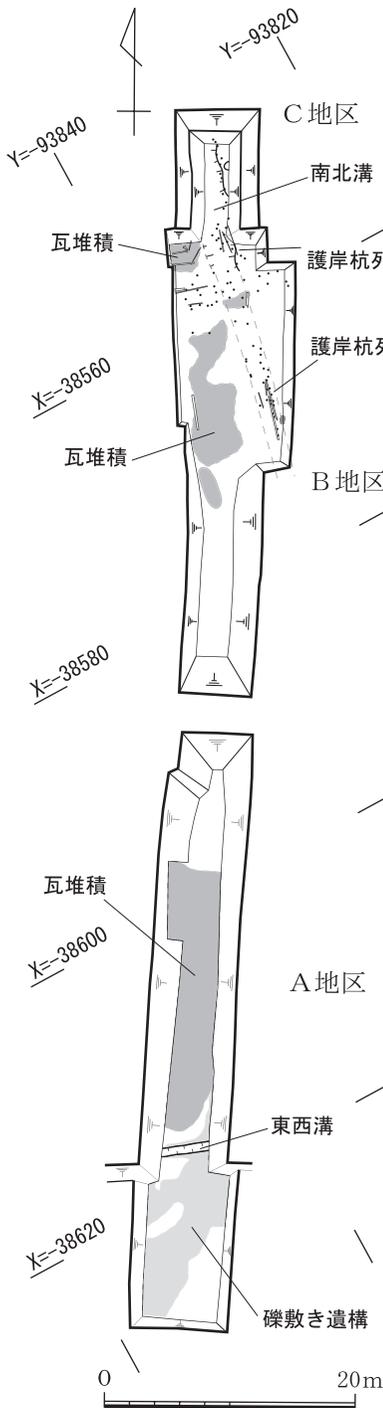
俵野廃寺は、発見された鋸歯紋のある複弁蓮華文軒丸瓦、重弧文の軒平瓦、細かい布目痕、格子叩き痕などの特徴から、飛鳥・白鳳時代にあたる7世紀後半の丹後最古の寺院と

して注目されていたが、平成18年まで84年もの間、発掘調査は行われていなかった。

調査は平成18～20年度(第1～3次)に俵野川地域防災対策事業(緊急河川整備)に伴い当調査研究センターが実施した。第1次調査は、遺跡の範囲確認および遺構の確認のための試掘調査を実施し、第2次調査は、試掘調査の成果をもとに、遺構・遺物を確認した地点を拡張し調査した。第3次調査は、第2次調査の北端部に接して、調査地区を設定し実施した(第2・3・4図)。



第2図 調査地配置図および周辺地形図



第3図 A～C地区遺構配置図

第1次調査では、調査範囲内に3か所の試掘調査区を設定し調査した結果、北側で設定した試掘①と心礎が発見された付近に設定した試掘②で、多量の瓦が堆積する層を検出した。南側に設定した試掘③では、長さ約50mの調査区を設定し、その北端部で、広範囲に拳大の礫が敷かれた面を確認した。

第2次調査は、瓦堆積を確認した試掘①・②を拡張して実施した。試掘②の拡張をA地区、試掘①の拡張をB地区として調査を実施した。A地区の中央部分において、南北の長さ約20mの広範囲で多くの瓦が15～20cm堆積した層を検出した。瓦堆積は、北から南へ約15mまでは厚く堆積していたが、南端部は疎らに散布している程度であった。また、若干であるが瓦堆積の上面から平安時代の土器が出土し、瓦堆積の下層から飛鳥時代の土器が出土した。南側には東西溝があり、この溝を境にして北側では瓦堆積、南側では礫敷きと分かれる。これらの状況から、建物域と礫敷きの広場的な空間を区切る溝であった可能性が考えられる。B地区では、西側半分で西から東へ傾斜した瓦の堆積を広範囲で検出した。東側では南北方向に杭や板材が並ぶ護岸施設と思われる遺構を検出した。瓦の堆積は厚さ15～30cmあり、A地区より堆積は厚いが小片が比較的多い。瓦堆積の上面から平安時代の土器が出土し、下層から飛鳥時代の土器が出土した。東側の護岸施設と考えられる杭や横板の上に、瓦の堆積が被っていることから、この護岸施設が寺がまだ存続していた時期もしくは廃絶後に瓦が片づけられる以前に設けられたものと推察される。

第3次調査は、B地区の北端に接してC地区の



A地区の瓦堆積状況



A地区南側で検出した礫敷き遺構



B地区の瓦堆積状況



B地区の東側、南北方向にならぶ杭列



C地区の南西部の堆積状況



C地区の瓦堆積と杭列

第4図 俵野廃寺の発掘調査

調査を実施した。南西側では、B地区の瓦堆積に比べると量は少ないが、瓦や土器、建築部材などが堆積する層を確認した。北半部では、瓦の堆積は確認できなかったが、南北方向の護岸施設と考えられる杭列の北延長部分を検出した。

A・B・C地区で検出した瓦堆積は、西から東に向かって傾斜し、西側の方が堆積も厚いことがわかった。また、調査区内には礎石や柱痕などの建物関連の遺構はなく、瓦堆積は2か所に集中している。これら状況から、塔などの建物の廃絶または解体による廃材の

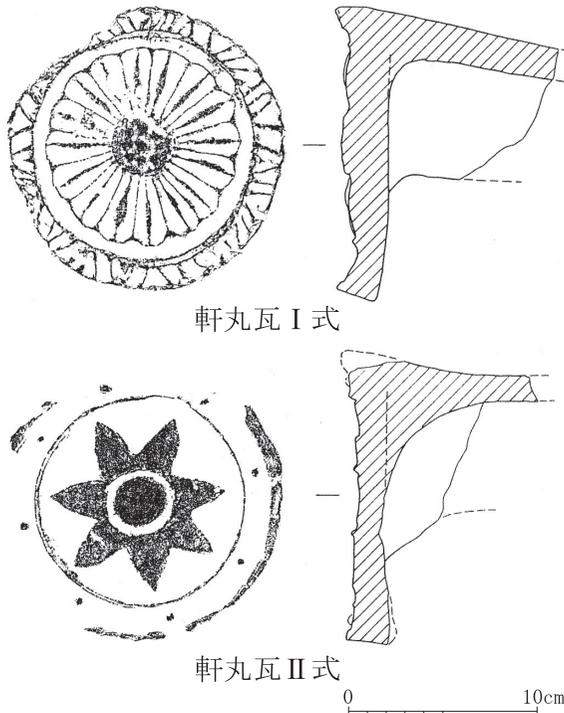
片づけがあり、東側の境である杭列および溝を覆い隠したと考えられる。この片づけの時期が、瓦や建築部材などを含む堆積層を形成した時期と考えられる。また、瓦堆積層の下層から出土した土器は、寺が存続した時期の一端を示すものと思われ、7世紀後半から8世紀初め頃にまとまっている。また、瓦堆積の上面で出土した土器は、寺の廃絶あるいは廃絶後の再堆積の時期で、おおむね平安時代(10世紀代)と思われる。

#### 4. ふたつの謎

##### (1) 謎の軒丸瓦

俵野廃寺では多くの瓦が出土したが、なかでも出土した2種類の瓦当の紋様をもつ軒丸瓦は特徴的なものであった。今回の発掘調査によって新たに発見された軒丸瓦である「軒丸瓦Ⅱ式」はユニークで、謎な存在である(第5・6図)。

「軒丸瓦Ⅰ式」とした軒丸瓦は、これまで発見されている軒丸瓦と同系のものである。瓦当の文様は、複弁で八葉の花弁をもち、周縁に三本一組で交互に向きを変える変形した鋸歯文があり、川原寺式の系統と考えられる。瓦当の文様は複雑であるが、花卉の綾線や調整などは雑で、胎土にも5mm程の石が混じっている。瓦当の貼り付けに関しても個体



第5図 軒丸瓦実測図

ごとに位置が異なる。焼成も須恵質に近く硬質に焼かれたものから乳白色で焼きが軟質のものまである。凹凸の大小から断面形状の異なる筈があり、相当数の同範瓦の存在が予想される。

もう一方の「軒丸瓦Ⅱ式」とした軒丸瓦は、瓦当面の紋様は素弁の七葉の花弁で周縁に鋸歯文はなく、軒丸瓦Ⅰ式(複弁蓮華文)とは大きく異なる。花卉は簡略化され、もはや花卉とも判断できないようなものである。何を模して制作されたのか不明である。花卉の造形も七葉とも形が異なり、粗い仕上がりが見て取れ、明らかに軒丸瓦Ⅰ式とは

別系統と言える。出土した4点の色調は、すべて乳白色に近く、焼成は軟質である。

このふたつの軒丸瓦が同時期に使用されていたのか、どういった経緯で使用されたのかは現段階では不明であるが、軒丸瓦Ⅱ式(七葉の花弁)は近畿北部にも同系列のものはなく珍しいもので興味深い。

A地区の瓦堆積層からは、軒丸瓦Ⅰ式が数点出土している。瓦堆積の南端部で、軒丸瓦Ⅱ式が2点出土した。B地区では、軒丸瓦Ⅰ式しか出土しなかった。C地区では、南西部の瓦堆積層から軒丸瓦Ⅰ式が2点と軒丸瓦Ⅱ式が1点出土した。

ほかの瓦類を見てみると、軒丸・軒平の量は少なく、丸瓦・平瓦(鬘斗瓦も含まれる)が大半である。軒平瓦に関しては、文様は重弧文で完形に近いものはなく破片が多い。瓦当面は型引きによって二本の弧線を描く。顎は、段顎型式で瓦当の厚さはそれぞれ異なる。調整は表面には細かい布目痕や桶巻きの板痕跡が残る。丸瓦では、段を持たず一方が細くなる行基葺き式のものや格子叩きをもつものは少量で、補修瓦として持ち込まれた可能性がある。平瓦は、凸面の叩きを丁寧になデ消したものが大半を占める。これが創建時の瓦であろう。斜格子叩きをもつものが一定量あり、別の建



A地区礫敷き出土の軒丸瓦Ⅱ式 (C地区)



俵野廃寺の軒丸瓦



俵野廃寺 軒丸瓦Ⅰ式



俵野廃寺 軒丸瓦Ⅱ式

第6図 俵野廃寺から出土したふたつの軒丸瓦

物に用いられた可能性がある。縄叩きのものを含め、そのほかの叩きをもつものは補修瓦であろう。調整方法から考えると、時期としては8世紀初頭(斜格子叩き)～8世紀後半(縄叩き)にかけて瓦の葺き替えもしくは一部補修が実施されたと見られる。平瓦に関しては、近隣によく似た斜格子叩きの瓦を焼成する堤谷瓦窯跡(8世紀初頭)が同市久美浜町丸山に所在するが、斜格子叩き板の文様幅は7.9cmであり、俵野廃寺の幅8.5cmとは異なる。この窯のものでないとすれば、未発見の供給元となる瓦窯が俵野廃寺近辺にあった推察する。

瓦を種類別に比較すると丸瓦が多く平瓦が少なく、比率的にはおよそ3対1となる。丸瓦が多い建物を想定すると築地などが想定されるが、関連する遺構は確認できなかった。

ふたつの軒丸瓦は、どちらもここ以外では出土例がなく、どこで生産されたのか、まったくの謎である。また、「軒丸瓦Ⅱ式」については、A地区の瓦堆積の南端部とC地区の瓦堆積の北端部に限られて出土している。この状況から考えると、寺院の建物によって軒丸瓦が異なっているのか、建物を囲む築地に使われていたのか、遺構を確認できていないため現段階では想像の域を出ない。

出土した軒丸瓦には、笱の制作に都の瓦工人が関与した可能性が高い都風のもの蓮の花の模様を簡略化した地元独自の笱を使用したと思われるものがあり、都を離れた土地での寺造りの苦勞がうかがえる。

この軒丸瓦の生産地や同笱瓦を含めた「謎」の究明は、さらなる俵野廃寺の調査や生産地である瓦窯の発見、ほかの遺跡での同笱瓦の出土などの成果を待たなければならない。

## (2) もうひとつの謎、伽藍配置

そして、もうひとつ謎がある。それは俵野廃寺の立地と伽藍配置についてである。なぜ、このような奥まった狭い谷筋の丘陵裾部と旧河川の間のごく狭い範囲に寺院が造られたのか。塔や金堂などの建物の伽藍配置はどのようなものであっただろう。

A地区の瓦堆積は、塔の心礎と思われる礎石が発見された地点に近接していたが、そのほかの礎石や基壇の痕跡を確認することはできなかった。調査区の東側には護岸をもつ南北方向の溝(流路)が流れ、さらに東方には俵野川の旧河川が流れていたことから、遺構が東側に展開する可能性は低い。西側は現俵野川の川底で塔の心礎と思われる礎石が発見されている。心礎とA地区までの距離は約8mしか離れておらず、この礎石が元の位置を保っていたとすれば、西側の丘陵との位置関係から考えると旧河川と丘陵に挟まれたごく狭い範囲に寺院が造られていたことになる。立地から考えれば、西側の丘陵上に寺を建てれば河川氾濫による水害もなく、日本海も広く見渡すことができ、人々の目にも触れやすい。なぜ、このような立地に建てたのか疑問が残る。もう一方の可能性として、伽藍配置を無視し丘陵の平坦部も利用して建物の配置をしていたとも考えられるが、想像の域をでない



調査地より日本海を臨む（南から）



俵野廃寺の立地（南東から）



調査地と丘陵裾の間を流れる  
付け替えられた俵野川（北西から）



谷筋の中央にはかつての俵野川が  
流れていた（南西から）

第7図 俵野廃寺の立地

のが現状である。

## 5. まとめとして

試掘調査を含め3度にわたる発掘調査では、礎石や基壇など建物に直接関連する遺構は検出できなかった。また、調査対象地が南北に長く、設定した調査区も幅が狭いことから寺院の全体像を確認できる成果は得られなかった。しかしながら、A・B地区において、瓦などの遺物が多量に堆積している状況を検出し、A地区の南側で礫敷き遺構を検出し広場的な空間の存在が想定される。

また、C地区では寺域の東端部の状況を確認し、瓦堆積の範囲の北東隅であることが想像できる。確認した瓦堆積は自然堆積ではなく、俵野廃寺が廃絶し、平安時代になって瓦などの片づけが行われていたと考えられる。瓦の出土状況から北東端部と南側の礫敷き遺構の間の空間に塔やそのほかの建物が存在することが想定できる資料を得ることができた。寺院の存続時期を示すものとして飛鳥時代後期から奈良時代後半（7世紀後半～8世紀後半）の瓦類や土器などが出土した。

寺院に関連する遺構は検出できなかったが、2種類の型式の軒丸瓦が出土したことにより、塔以外に瓦葺きの建物が存在し、各建物の創建時期による型式の違いまたは、補修瓦と考えることもできる。しかし、軒丸瓦の時期差は今回の調査では判明しなかったが、当時の丹後地域における瓦生産技術を知るうえで貴重な資料といえる。

俵野廃寺の周辺地名では、字名に、塔の坪、寺口、寺屋敷、防垣などの寺院を思わせる地名が残っている。また、与謝郡成相寺に伝わる「正徳元年」（1288年）の「丹後国諸庄郷保惣田数帳」には、木津の条下に「一町三段旦經寺十八町五段百八十歩同帰院」と記載されており、位置の特定はできないが古くから寺院があったことが記されている。

近隣の「木津」の地名が示すように、古代港湾という要所に建てられたと考えられる俵野廃寺は、奈良時代に丹後国分寺(宮津市)が建立されるまでは、丹後唯一の古代寺院として、独自の2種類の軒丸瓦を葺いた伽藍が威容を誇っていたと推察できる。

なぜ、この奥まった狭い谷筋の丘陵裾部と旧河川の間のごく狭い範囲に寺院が造られたのか。どのような背景のもと建立され、伽藍配置はどういったものであったのか。また、俵野廃寺に葺かれていた軒丸瓦やそのほかの瓦はどこで焼かれた瓦を使用しているのか、現時点では「謎」のままである。

(むらた・かずひろ = 当調査研究センター調査第2課調査員)

注1 確認されている遺構は、鎌倉時代に再建された伽藍配置である。創建時期は出土瓦より奈良時代末頃とされるが、未調査のため、当時の寺域や伽藍配置は明らかではない。

注2 鎌倉時代の「丹後国諸庄郷惣田数帳」に名をとどめるが位置は不明である。

#### 参考文献

- 岡田茂弘「丹後俵野廃寺」(『貝塚』77号 物質文化研究会) 1958年  
林和広「俵野廃寺出土の古瓦」(『太邇波考古』第3号 両丹技師の会) 1983  
「網野町の遺跡」(『京都府網野町文化財調査報告』第4集 網野町教育委員会) 1986  
網野町誌編纂委員会「第二章古代」『網野町誌』上巻 1992  
小山元孝・橋本勝行「俵野廃寺の鬼瓦」(『太邇波考古』第23号 両丹技師の会) 2005  
菱田哲郎「丹後地域の古代寺院」(『丹後地域史へのいざない』 思文閣出版) 2007  
村田和弘「俵野廃寺発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第122冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2007  
村田和弘「俵野廃寺第2・3次発掘調査報告」(『京都府遺跡調査報告集』第132冊 財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2009